

2017年（平成29年）5月23日（火）
第30回霧ヶ峰自然環境保全協議会 資料

霧ヶ峰延焼地影響調査（2016年度 経過報告）

1 概要

2013年（平成25年）4月に霧ヶ峰で生じた火入れの延焼による生態系（植生・鳥類・昆虫類・気象等）への影響を評価するため、環境保全研究所の経常研究の一環として経年観測（モニタリング）を実施中。

2014年（平成26年）度までの調査では、延焼地では(1)枯草の量が減って非延焼地よりも緑におおわれる時期が早くなる傾向があり、(2)レンゲツツジの開花が減少し、(3)鳥やチョウで草原性の種が確認された。これらのことから、延焼が草原環境の拡大に一定の効果をもったと考えられた。ただし、悪影響がなかったかどうかは延焼前のデータがないため不明である。2015年（平成27年）度には、草原が緑になる時期やレンゲツツジの開花に延焼地と非延焼地で差があまり認められなくなった。

2016年（平成28年）は、定点自動撮影カメラによる草原の季節変化（新緑等の時期）の調査、および昆虫（チョウ類）目視による調査を前年にひきつづき実施した。

2 調査の実施期間

2013年（平成25年）5月から5か年程度（調査結果に応じて期間を検討）の予定。

3 調査地

霧ヶ峰高原（茅野市から諏訪市）の火入れ地・延焼地および隣接する非延焼地



図. 調査位置図（空中写真の撮影は2013年、調査項目は2016年のもの）

4 調査内容与方法

調査項目	調査内容与方法	進捗状況
季節変化	・草原の新緑等の時期：定点自動撮影 (延焼地・非延焼地の比較)	・定時に自動撮影 (2014年4月から)
動物相調査	・チョウ類：目視による現地調査 (火入れ地～延焼地)	・2016年6月22日・7月21日に 計2回調査を実施
物理環境	・観測機器を設置 延焼地/非延焼地：2地点での観測	・気温・地温・土壌水分・反射日射を 測定(2013年9月から)

5 2016年度(延焼3年後)の調査結果と考察

(季節変化) 定点自動撮影の画像により草原景観の季節変化を非延焼地と延焼地とで比較した結果、緑色になる時期に差が認められなかった。前年までは差の認められた5月中においても、また年間を通じて、差が認められなかった。延焼直後には大きな差のあったレンゲツツジの開花も、差が認められなかった。延焼による草原の外観への影響は、ほぼ消えつつあると考えられる。

(動物相) チョウ類の種構成はこれまでと似た傾向が見られた。草原性の種が多く確認され、森林性の種が少数確認された。個体数で上位を占める種には若干の変動があったが、2013年以来の4年間の傾向として目立った変動ではなかった。霧ヶ峰で通常多く見られる種のほか、レッドリスト掲載種6種が確認された。ただし今後、草原の遷移が進んだ場合の変化は予見しがたい。したがってより長期の観測も視野に入れる必要がある。

(物理環境) 延焼地と非延焼地のちがいは明瞭ではない。

(今後の予定) 延焼による季節変化・動植物種・物理環境等への影響は経年的に変化する可能性がある。その影響を把握するため、継続して調査を行う予定である。